

---

# 落ちこぼれの魔法使い

うさぎとかめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

落ちこぼれの魔法使い

### 【Nコード】

N1758BA

### 【作者名】

うさぎとかめ

### 【あらすじ】

魔法や魔物が存在する世界で魔力がかなり少ない主人公が嘘やハッタリで何とか一流の魔法使いになる話です。 作者が初心者です。

## プロローグ（前書き）

うさぎとかめと申します。

初心者ですので感想などぐねると嬉しいのです。

よろしくお願いします。

## プロローグ

「どうだった？テスト結果は」

金色の髪に整った顔、つまりイケメンの容姿を持つ俺の友人レイン  
「リニカルドにいつも通りの言葉を返す。」

「筆記は普通。だが実技がだめだった」

そう筆記は学年の400人中92位だったのだが実技が400人中  
400位だったのである。

このガディア魔法院でのテストは魔法についての筆記試験と実際に  
魔法を使う実技試験の2つがある。

ちなみに今回のテストは1年に4回あるうちの3回目である。

「しょうがないよ。魔力があれだから」

「魔力が極端に少ないから俺は」

そう俺ことクルス「ミルトは普通の魔法使いが初級魔法を最低50  
回は使うことができるのに対して3回しか使うことができないので  
ある。」

「生まれつきだからな魔力量は、少ない分魔力の回復が速かったら  
よかったのにな」

「多くても少なくとも回復速度は同じだからな」

「例の魔法書また借りていいか？」

「了解です。それよりレインはテスト結果どうだったんだよ」

「今回は筆記が8位で実技が6位だった」

「レインは成績いいもいいな。俺は今から補習だよ」

補習はテストの成績が配布されて1週間の間行われる。

「ドンマイ、頑張れよ」

「頑張ってくるよ、じゃあな」

今からやるだろう補習内容に対してため息をつきながらレインと別れて補習をする実技教室に向かった。

## 1話 補習Ⅱ 戦闘（前書き）

見ていただいております。

前回は短かったので少し長めに書きました。

誤字などを指摘をして頂けるとありがたいです。

## 1話 補習Ⅱ 戦闘

補習が始まり数分で予想していた通り俺の魔力が切れた。

「アルト先生、魔力が切れたんですが帰ってもいいですか？」

今日の補習はかなり集中してやったが初級魔法のフレイムボールを唱え教室の壁に炎の固まりを3発当てて俺の魔力が終了した。もう正直帰りたい。

「駄目です。魔力が切れても絞り出さない」

やはり帰れなかった。補習担当のアルト先生は紅い髪の20代前半くらいの女性でかなり教え方がうまいらしい。だが教え方がいくらうまくても生徒の魔力が少ないからと言って絞り出せぐらいしか教えることがないのはさすがに酷いと思う。ついでにいろいろと扱いが雑だ。

「だから補習嫌なんだよ」

「そんなこと言わないの少しは楽しんでやろうよ」

後ろから話しかけられて振り向くと肩まで伸ばした栗毛に可愛らしい顔を持つ少女が立っていた。

「だったらフルラが魔力0で絞り出そうとしてみなよ何もでないから」

「そんなことないぞ。俺の友達の兄の友達の違うクラスの友達の知り合いの友達の妹が魔力が無いときに根性で伝説級の魔法であるメテオストライクを放つたらしい」

毎回適当なことを言うこの黒髪の男、ルマⅡテインは残念ながら俺の幼馴染である。

「ちよっと待て、まずお前はフルラじゃないだろ、それと説明長い

し、最後の根性つて無理だろ」

伝説級の魔法は魔力を馬鹿みたいに消費して使う大量破壊魔法らしい。使える人を見たことは無いが。

「まあ、とにかく楽しんでやればいいんじゃないか」

「その通りだよとにかく楽しんでやればいいんだよ」

「といつてもな暇だし、楽しくね」

その後、フルラは元いた教室中央の場所に戻り、俺がルマと無駄話をしていると突然教室中にフルラの綺麗な声が響いた。

「我フルラ＝リユーストの呼びかけに応じよ、出でよローウルフ」  
言い終わると同時に紫色の魔方陣がフルラの前に出現した。フルラは召喚魔法系のクラスに属しているので召喚系の魔法が使えるのだが…。

「ちょっと待てルマ、あれ前のテストの補習でもミスった召喚魔法の詠唱だよな？」

「そうまったく一緒、魔力の加減ミスすると命令を聞かないローウルフが教室中に溢れるやつ。そして、フルラは魔力の加減苦手だ」

「アルト先先を呼べあの魔方陣を解除してもらおう」

「そういえば職員会議があるってさっき教室から出て行ったけど」

「マジかさっきまで居たじゃん。また落ちこぼれの補習生50人で戦うのか」

「まだ失敗したわけじゃないフルラを信じるんだ最後まで諦めるな」  
見守っているとフルラが笑顔で近寄って来た。

「あれもしかして成功じゃね」

「そうだよ。あれから月日が経ってるんだ同じ失敗するわけがない」

「ごめん魔方陣のコントロールきかなくなっちゃた」

ゆっくりと頭を下げながらフルラが謝った。

「全員、武器を取れ、フルラのローウルフが来るぞ」

ルマの呼びかけで50人中40人くらいは前回もいたので理解も速く武器を構えた。

武術の授業があるので生徒は一人一つ武器を持っている。ちなみに俺とルマは剣である。

全員がフルラの魔方陣から一定の距離を置いたと同時にローウルフが出現した。最初にざっと数えて20ぐらいかと思ったが魔法陣からさらに20ぐらい出てきた。前は10体ぐらいだったはずだ。

「一応聞くけどフルラ魔力どれくらい使ったんだ？」

フルラが満面の笑みを浮かべた。

「全部」

「よしみんな頑張ろう」

聞かなかったことにして襲い来るローウルフと対峙することにした。

## 2話 狼Ⅱ犬（前書き）

見ていただきありがとうございます。

今回はほんの少しだけ戦闘シーンらしいもの？を書かせていただきました。

誤字や理解できない点、不明な点がありましたら指摘して頂けると嬉しいです。

## 2話 狼Ⅱ犬

ローウルフとはF、SSまである魔物の危険度の中で一番下のFである。鋭利な爪と牙があるが例え魔法の実技で順位が一番下でも武器があれば負けることはないが…。

「所詮Fランクだな、しかしルマ、ヘルプだあ〜〜」  
5対1はさすがに無理。戦闘開始から数分で俺はローウルフ追いかけて回されていた。

「所詮Fランクたる頑張れよ、こつちも手が離せないから」  
ルマが両手で持っている長剣が2体のローウルフに噛み付かれて振りほどこうと剣を振り回していた。

「魔法使えよ、それでも魔法使いか」  
「お前にだけは言われたくない。それに魔法3連射が失敗したからこつちも魔力が切れたんだよ」  
魔法は成功すれば決められた量の魔力で済むが失敗すると初級魔法でも大量の魔力を消費する。  
ちなみに失敗すると魔法が発生する予定の場所で小さい爆発が起る。

「お前だろ一斉攻撃で初めに失敗したやつ」  
戦闘開始時は魔方阵に向かって一斉に魔法を撃ち40体は簡単に倒した。その後魔方阵から新たに30ぐらいが出現した。2回目の一斉攻撃の途中でどっかの馬鹿が魔法の3連射を失敗し、周りの生徒も一緒に吹き飛ばされた。それだけで済めばよかったが吹き飛ばされた生徒が魔法を失敗してそれに吹き飛ばされた生徒がまた失敗するという負の連鎖で補習生の連携は一瞬にして崩れた。

「そ、そんなことねーよ。むしろお前だろ」

「ふっ魔力が2発分しか回復してなかったから3回も失敗できん」

「胸を張って言うなよ」

言い切ると同時にルマが長剣を思い切り振って長剣に噛み付いているローウルフ2体と俺の後ろにいるローウルフ3体を衝突させた。すごい勢いで衝突したため5体のローウルフの動きが鈍くなったようた。

「助かった、さすがルマだ」

俺は追ってくる残り2体のローウルフの方を向き直り先に襲いかかってきた方を愛刀の深紅のレイピアで一刃両断し、続けて襲いかかってきた方もその勢いのまま切り倒した。ルマの方を向くと既に先程の衝突で動きが鈍くなっていた五体はすでにルマによって倒されていた。

「あれ、お前の武器レイピアだっけ」

「一斉射撃の時の爆風で俺の剣がどっかに飛ばされた代わりに親切にも足元にこのレイピアが落ちてたんだよ」

「後で持ち主に返しといてやれよ」

「はいはい、でもこれいい剣だよな普通にほしいんだけど」

「泥棒があたしの剣返せ」

「ぐはっ」

突然の赤い髪の少女の飛び蹴りによって倒された。しかも、その隙に赤い髪の少女はレイピアを持っていつてしまった。

「あつ俺のレイピアが。そしていつてえ誰だあいつ」

「お前のじゃないだろまあうちのクラスではないな。人の剣を勝手に盗むからこういう目に会うんだろ気をつけるよな」

「借りてただけなのに未練はあるが。それよりそろそろ戦闘は終わ

りじゃないのか？もう限界だ」

ローウルフをすでに俺が倒しただけでも7体は倒したはずだ。ローウルフとの追いかけてこと赤髪の少女のとび蹴りによって体力がごっそり持っていかれていた。

ルマが周りを見渡してから答えた。

「終わったと思うが今回の数は多かったな。二百はいたと思うぜ」  
「つい先ほどまでフルラの魔法陣は巨大化しながらも休むことなくローウルフを召喚していた。」

「フルラは才能あるんじゃないか、壊れずにあの数を召喚できる魔法陣を作れて」

「クルス呼んだ」

話しをしてるとフルラが駆け寄って来た。

「呼んでは無いけどフルラの話はしてた」

「何の話」

ルマが周りをもう一度見渡しながら答えた。

「フルラの魔法陣が大量に召喚したのに壊れなかったからフルラは天才だなんて話。さすがにもう壊れたけど」

「そんな褒めないでよ私は天才じゃないし」

「たしかに魔力の加減をミスるのはやっぱ天才じゃないよな」

「クルスの言うとおりだよ。まだ魔法陣だってまだ消せてないし」  
フルラが言いながら天井を指差した。指差した天井を見ると教室の天井すれすれに巨大な魔方阵が存在していた。

「あれはまずい、全員上を見る、まだローウルフが来るぞ」

戦闘が終了したと思って座っていた生徒が急いで戦闘態勢をとり立ち上がる。

「クルス別ににも起きなく、わっ何だ」

ルマが話している途中で猛獣？の叫び声が教室中に木霊した。少しして魔方陣から3つの頭を持った犬つまりケルベロスが召喚された。

「フルラあれってランクBだったよな、なんでローウルフの召喚の中に混ざってるんだ」

「Bだね狼と犬って似てるからじゃないかな」

「似てるからって召喚できるものなのか、とにかく逃げよう」

「全員急いで教室の出口まで走れ、ここは俺とクルスに任せろ、フルラも危ないから避難したほうがいいよ」

ルマの声で一斉に生徒たちが出口へと走り出した。

「召喚したのは私だから逃げるわけには行かないよ」

フルラの力強い声にルマは諦めたように返事を返す。

「わかった。でも無理はしないように、じゃあ3人で倒すかケルベロスを」

「ごめん、仕切つてるとこ悪いんだけど俺魔力空だし今武器持っていないんだけど逃げてもいいか」

「なんとかなる、行くぞ」

「えっ」

驚く俺を他所に、かくしてケルベロス対落ちこぼれ3人の戦いが始まった。

### 3話 主役「遅れてくる」(前書き)

見ていただきありがとうございます。

今回は戦闘シーンを長めに書きました。

なので戦闘シーンについて理解できない点や感想や直すべき点などを頂けるとありがたいです。

### 3話 主役「遅れてくる

「Bランクなら手加減はしない行けライトニングソード」  
フルラの中級の雷魔法である雷の剣がケルベロスに向かう。

「いきなりとばすね」なら俺もエアークロス」  
ルマの中級の風魔法によって生まれた2つの竜巻が雷の後に続く。

「ケルベロスとはBランクの獣で3つの頭が特徴でそれぞれの頭が意思を持っていると言われる。強力な炎のブレスであるヘルファイアの威力は強大である。そして俺のケルベロスの解説も2人の攻撃の後に続く」

「お前の攻撃棒読みの解説かよ、お前の剣あっちにあるから速く取ってこいよ」

ルマが指差した所に俺の愛刀があるのを確認して走り出す。

「俺の愛剣よ待っている」

ケルベロスは第一撃であるライトニングソードを真ん中の口で受け止め粉々に噛み砕いた。間を空かずにきた2つの竜巻をジャンプで回避する。

「さすがに上級魔法がないときついかな」

フルラは弓を構え空中で身動きのできないケルベロスに立て続けに魔力で作成した矢を全部で3発放った。しかし、当たる直前でケルベロスの大声により動きが遅くなり矢は勢いを失い当たることなく落下していった。

「スロウボイスかやっかいな」

スロウボイスは目で認識した相手に近い距離で使うと効果がある。喰らえばその名のとおりの動きが遅くなる魔力を帯びた大声である。ケルベロスはジャンプによって距離を詰め矢を射ったフルラ目掛けて走ろうとしたが待ち構えていたルマが斬りかかる。

「フルラ今のうちに攻撃しろ」

ケルベロスはルマの剣を右の前足の爪で受け止める。さらに左の前足で反撃に出たがぎりぎりのところでルマは避けた。

「わかった」

フルラがさらに4発矢を射ったが斜め後方に下がることでケルベロスは回避しルマに再び襲い掛かる。

「Bランクといたって避けることだけを考えればこのくらいの攻撃」  
右の前足をルマが避けたのと同時にケルベロスがスロウボイスを放った。

「こ、このタイミングかよ」  
動きが遅くなっているルマに左の前足が襲い掛かる。

「おっと危ないな」

ぎりぎりですぐ左の前足を取り戻した愛刀で受け止めその隙に回復したルマが右足を斬りつけた。

「クルトマジで助かった」

「油断大敵だぞ、フルラ、ルマ一気に決めるぞ」

「うん、わかった。集いし、百の魔力よ、」

フルラの詠唱を開始し、弓の前にフルラの身長と同じくらいの大きさの水色の魔方陣を展開する。普通の戦闘で魔法は詠唱破棄で使うがそれだと威力が減少してしまう。実戦ではまず集中して唱える

暇が無いので使えないが仲間が時間を稼いでくれれば詠唱する暇ができる。

「目潰し」

飛び上がりながら魔力が回復したのでケルベロスのそれぞれの頭の目に向けて自慢のフレイムボール3発を放つ。初級魔法のためダメージは少ないが一時的に視力を奪う。

「ルマ今だ」

「魔力全部使ったエアーカーテンだとくと味わえ」

初級魔法はうまく魔力使用量を増やすことによって威力が上がる。ルマの魔力を全て注ぎ込んだエアーカーテンの発動によりケルベロスの四方へと強風が吹き荒れケルベロスの動きが止まる。

「雷の刃となりて敵を貫け 発動！ロストバースト！」

エアーカーテンの発動し終わると同時にフルラの詠唱が終わり水色の魔方陣から百本の雷を纏った矢が身動きのできなく、目が見えずスロウボイスが使えないケルベロスに真正面から殺到する。

3人が終わったと思っただがその予想は儚くも碎かれる。

ケルベロスのヘルファイアーによって。

「相殺された」

「ルマ違うぞ、みんな伏せろ」

ロストバーストによって相殺しきれなかったヘルファイアーが3人を教室の壁付近まで吹き飛ばした。

「みんな生きてるか」

「ボロボロだが何とか大丈夫」

「こつちも何とか無事だよ」

視力が回復し、風による拘束から解放されたケルベロスが第2射

目のヘルファイアーを放とうとこちらに向けて3つの口を開く。3人とも避ける体力はない。再びヘルファイアーが放たれる。

「これはまずいね」

突然、3人を覆うように現れた金色の翼によってぎりぎりヘルファイアーが防がれた。

「3人とも無事か」

「レインナイスタイミングだけでもっと速く来てほしかったよ」

「こつちだつて急いで来たんだから、まあ後は任せてよ」

ケルベロス対レインによる第2回戦が始まった。

#### 4話 友達「最強」(前書き)

4話まで見ていただきありがとうございます。  
今回は短いです。

#### 4話 友達Ⅱ最強

固有属性とは得意な属性のことである。魔法の基本の属性は火、水、氷、風、雷であり、9割以上の人の固有属性はこの5つの中のどれか一つだがそれに含まれない1割未満の人は無や闇など普通の人が使えない属性を持った人がいる。

レインの光属性のように。

「さて、ワンコと遊んでくるか」

レインは光の魔法によって作られた金色の光を放つ翼で高く飛翔した。飛翔したレインをヘルファイアーでケルベロスが狙い撃つが軽々と回避しケルベロスに接近する。

「にしても、でかいなこいつ。発動シャインステイク」

ケルベロスの噛み付きを宙返りで回避し、追撃の両前足を光を纏った双剣で受け流す。前足が地面に着いたのと同時に光の杭が3本ずつ計12本がケルベロスの足に突き刺さった。反撃しようとしてケルベロスはスロウボイスを使おうとしようと口を開いた。声が出るより速く真ん中と右側の頭を斬り落さしレインはその勢いのまま左の頭の後方に移動した。そのためスロウボイスの効果は無かった。

「お前に恨みはないが悪いけどドメだホーリーマテリアル」

ケルベロスを中心に黄色の魔方陣が展開し黄色の結晶がケルベロスを閉じ込めた。

「戦闘終了了」

光の翼が消えレインが3人の近くの地面に着地した。

「お疲れさん」

今度こそ、戦闘が終了した。

「それにしても何でレインが来たんだ？先生ならまだしも」  
ルマの問いかけはもっともである。

「職員会議やってる会議室に入れなくて補習の生徒が困ってる」ところに通りかかったんで話しを聞いて助けに来たわけ」

「なるほどね」

フルラがポンと手を叩いた。

「内の幼馴染が迷惑をかけて悪いな」

レインが申し訳なさそうに謝る。

「まあ怪我とかないいんじゃないか」

「そうそう気にするなよ」

ここは笑ってすんだが少しして来たアルト先生にたっぷり何故かルマが怒られその後、レインも手伝い教室の片付けをしてやっと長かった補習が終わった。

#### 4話 友達Ⅱ最強（後書き）

誤字などの指摘をして頂けると助かります。

## 5話 ルマ＝壁(前書き)

見ていただきありがとうございます。

すみませんさすがに2話の投稿は無理でした。

誤字などを指摘していただけると幸いです。

## 5話 ルマ＝壁

ケルベロスを倒してから1週間たち補習も終わり今日はとても爽やかな朝だった。

「とにかく俺は彼女が欲しいんだよ。入学して半年以上経つんだぞどうすればいいんだ？」

ルマは机を叩きながら俺に問い掛けたが声が大き過ぎて問い掛けを聞いたクラスの女子からの視線が怖い。

「まあ落ち着け、まずその発言を大声で言わないほうがいいぞ」

「そうそう彼女欲しいのみんな同じだから」

レインが話しに参加してきた。

「レインは女子から人気あるから俺の気持ちはわからんよ」

ルマがため息を吐きながら否定したその時教室のドアが勢いよく開いた。

「レインあたしと勝負しなさい」

週1回は必ず来る青髪の美少女アミスはたびたびレインに勝負を挑んで来る。

「うわ、また来た。環境を考えるよここ教室だぞ」

「あたし細かいことは気にしないの」

アミスの蹴りがレインを狙うがぎりぎり回避して後ろに下がる。それを見ていた俺たちはのんきに話をしていた。

「大変そうだな」

「いや羨ましいいだろ相手が美少女だぞ」

「美少女なら誰でもいいのかよ」

「その通りだ」

胸を張るルマから視線をレインに移すと見るとレインの後ろは壁で完璧に追い込まれたようだった。

「じゃあ行つてこい。レインこれを使え」

ルマを俺は思い切り突き飛ばした。

「悪い助かった」

レインがルマをキャッチし盾にした直後アミスの蹴りはルマにきれいにきまつた。その勢いでルマは体の半分が教室の壁に埋め込まれた。ガディア魔法院の教室の壁は素材はわからないがかなり軟らかい。前に先生に聞いたことがあるがその時は長い沈黙の後、スルーされた。この壁に埋め込まれると1人では抜け出せない。

「ヘルプ」

ルマは何か言っているようだが完全に無視である。ルマの声で興奮ざめたのかアミスはすぐに自分のクラスに帰っていった。

「毎朝大変だな」

「まあいつものことだからなそろそろ授業始まるぞ」

1時間目は魔法基礎学である。担当はアルト先生だから頑張らないと補習が待っている。

「はあゝめんどくさいな」

こうしてガディア魔法院の1日が始まった。

結局この日誰もルマを助けてくれず1日中壁に埋め込まれていたままだった。

## 6話 仲間「男の中の男」(前書き)

見ていただきありがとうございます。

誤字などを指摘して頂けるとありがたいです。

## 6話 仲間Ⅱ男の中の男

俺達のクラスである11クラス。一学年に10クラスある内の一つだ。

60人は入るだろう木の床の教室に放課後各クラスからの精鋭なる男達30人が円を描くように机を置き、椅子に座っていた。今日は大事な会議である。

少し段差がある黒板の方の教卓の所にルマいや、議長が座っていた。右に1〜5クラスまでが座り左に残りの6〜10クラスが座っていた。

他クラスの生徒が協力したり仲良くすることはあまりないが全員が硬い決意で結ばれていた。

いや正確には一人というか俺はあまり乗り気ではないが…

「ではこれより第7回リア充撲滅委員会を始める。では今日の案件について副議長よろしく頼む」

議長の大きな声が教室中に響き渡る。この自信の溢れた声は昨日壁に埋め込まれてそのまま一泊した人とは思えない。

「え〜今日の案件の一つ目は16クラスの男子が先週5対5の合コンを開きカップルが2つ成立したそうです」

何故か副議長をやっている俺の声を聞き、男達が話し始める。

「16クラスなのに俺は知らないぞ、どういうことだ」

このリア充撲滅委員会はガデア魔法院の3学年にそれぞれ1つずつ存在してるらしく情報網がすごく発達してるらしい。

「何て羨ましいんだ」

精鋭Ⅱ彼女いない歴生生まれてずっとこの男達は動揺を表した。

「ど、どうせ胸のない連中の集まりだろ」

「そ、そうだ気にすることではない」

この委員会には巨乳派と貧乳派などいろいろな派閥が存在する。

「それでも俺は参加したかった」

「いや俺の方が参加したかったさ」

「違う俺だ」

白熱する話し合いだが。

「静粛に副議長補足情報はあるか？」

議長の声により場が静まった。

「え〜つとですな我々の作成した美少女ランキングの上位ランクのタガサさんとイルさんが参加したそうです。イルさんの方はカップル成立の方に名前があります。」

「人間国宝の巨乳を持つタガサさんと」

「何で俺を呼ばないんだよ」

「俺今日は一晩中寝ずに走るよ」

悲しみに男泣きする巨乳派閥の皆さん。

「お前らはまだいいじゃないか。イル様何て彼氏が出来たんだぞ」

「あの小さな背に控え目な胸はもうみんなのものではないのか」

「我々の希望が」

貧弱派閥は全員放心状態だ。

「みんな泣くなよ、俺はどっちもの派閥にも属してるんだぞ」

みんなに注意する議長。だが彼も泣いている。

「議長〜〜」

議長に抱きつく男達。傍から見て正直絵が汚い。

「え、補足情報はもう一つでそこで泣いた振りをしているムハト君がイルさんのお相手だそうです」

俺の爆弾発言で全員の視線がムハトに集中した。

「いや、あれっすよ」

泣いた振りをやめ言い訳しようとする裏切り者を全員で取り囲んだ。

「くたばれよオラオラ」

派閥関係なく全員でハルトが力尽きるまで蹴り続けた。ストレスを発散した所で議長がみんなに語りかける。

「よし話し合いをしようか次行こう次」

一人の犠牲を出したものの会議は続いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1758ba/>

---

落ちこぼれの魔法使い

2012年1月9日22時47分発行